

三浦哲郎(みうら・てつお)☆常設展示作家

1、三浦哲郎の生涯

<生涯1 幼年期～スポーツ少年として活躍> 0歳～18歳 1931～1949

八戸市の中心街でも、最も中心となる場所に誕生。両親はこの中心街で“丸三”という屋号で呉服屋を営んでいた。家の近くに書店があり、講談社の絵本や少年倶楽部などを買って貰い、冒険や探検にあこがれる少年時代だった。小学校にあがる前後に、後に三浦文学の核となる、家族の不幸にあうが、世の中全体が目まぐるしく急変を告げる中で、旧制中学校に入学。戦後の学制改革により、旧制中学校入学～新制高校編入、卒業という変革期の中に、青少年期を過ごした。中学～高校時代は、前半に剣道、後半にバスケットボールに熱中して国体に出場し、準決勝まですすみ“隼の哲”と呼ばれるスポーツ少年であった。

<生涯2 文学への開眼～大学時代> 19歳～26歳 1950～1957

早稲田大学政経学部に入學し、次兄益男の物心両面での援助を得ながら学生生活を過ごしていたが、在郷級友の船越康昌と出会い、船越の影響で文学に開眼、傾斜していった。

大学2年の春、次兄が突然失踪したことから休学し帰郷。この頃から一家の悲劇的な“血というもの”について考えるようになった。2年間八戸で中学校の助教諭を務め、この前後、文学の道を歩むことを決意。

22歳で再度早大文学部に入學。仏文学科の仲間と同人雑誌「非情」を創刊。大学の助教授で作家でもあった小沼丹に注目され知遇を得、さらに「誕生記」「ブンペと湯の花」「遺書について」が井伏鱒二の目にとまり、小沼丹を介して井伏邸を訪問し、井伏に師事。

<生涯3 芥川賞受賞～作家として始動> 27歳～45歳 1958～1975

昭和30年12月、井伏のすすめで旧作を改題執筆した「十五歳の周囲」が「新潮」に掲載され、この作品で第2回新潮同人雑誌賞を受賞。31年1月、後に「忍ぶ川」に登場する志乃、海老沢徳子と結婚。翌年大学を卒業し、文筆生活を目ざし

たが、以後3年ほど貧困、父の死、病気と多難な時期を過ごしたが、作品だけは書き続けた。

意を決し上京しPR編集社に勤務しながら「忍ぶ川」を書き上げ、「新潮」に掲載。昭和36年2月「忍ぶ川」で芥川賞を受賞し、本格的に作家生活をスタート。間断なく精力的に作品を発表し続け、小説に加えラジオドラマの原作、随筆などと幅広く活動。「繭子ひとり」がテレビで放映され、好評を博した。

<生涯4 文壇に不動の地位を確立> 45歳～79歳 1976～2010

昭和51年には『拳銃と十五の短篇』で野間文芸賞を受賞。休むことなく旺盛な執筆活動が続けられ、昭和58年には『少年讃歌』で日本文学大賞を受賞。翌59年には「忍ぶ川」以来の“血の問題”を軸とする三浦文学の集大成ともいえる『白夜を旅する人々』を刊行し、60年に大佛次郎賞を受賞。また62年～63年にかけて『三浦哲郎自選全集』（全13巻／新潮社）を刊行。63年12月には、青森県人として初めての日本芸術院会員となり、「じねんじょ」で川端康成文学賞（平成3年）、『短篇集モザイクⅠみちづれ』で伊藤整文学賞（平成3年度）を受賞する等、現代文学界の中で不動の地位を確立した。芥川賞など各賞の選考委員を務めた。

2、三浦哲郎の代表作

○「忍ぶ川」

文学へのスタートは早大在学中の、同人誌「非情」に発表した作品であったが、「忍ぶ川」は第44回芥川賞を受賞し、文壇にデビューを果たした記念すべき作品である。4人の兄姉が次々に自殺・失踪するという不幸な血の宿命を背負った主人公が、学生寮の近くの料亭“忍ぶ川”で女中志乃をみそめ、愛し合い、ささやかな家庭を築きあげていく様子を抒情的に描いた作品。

「不幸な生い立ちの男女が、ひたむきな愛によって再生していく話を、抒情的に描いた人間讃歌。特に二人に因縁のある深川を訪ねる冒頭部分と雪国の生家で迎える初夜の場面は秀逸…」と、文芸研究者の東郷克美は賛辞を与えている。

○『少年讃歌』

三浦文学を“私小説”という枠組みの中で捉えようとする研究者もあるが、歴史小説も三浦文学の中の一方の特色である。中でも『少年讃歌』は、天正少年使節団の軌跡をテーマに、約8年の歳月をかけて書きあげられた長篇歴史ロマンで、三浦文学の歴史小説の代表作品。

文学の師である井伏鱒二が、長い期間にわたって作品のテーマとして温め、歴史資料を集めていたが、「ある時先生が、少年使節の旅行が面白いと思う、とおっしゃった。先生がお書きになりたかったのではないかと推察しているんですが…」と後に三浦が語っているように、恩師の意志も汲んで書き上げられた作品でもある。

○『白夜を旅する人々』

三浦文学の中核を構成する、作者自身の家族を素材に、厳しい血の宿命を負った兄妹にふりかかる悲劇を、半世紀後に渾身をこめて、鎮魂の思いで書きあげた、一連の“血の宿命”に関わる集大成の書でもある。

「忍ぶ川」をはじめとして「恥の譜」「幻燈画集」～「初夜」など、連綿と書きつがれてきた、作者へ与えられた課題に対する総決算の思いで書きあげられた作品。

「決してひとごととも、まったく特殊な例ともいいきれない気がする。事情こそ違え、どの家庭にもそれぞれの悩みや悲哀はあるはずだから。人間が生きていくという意味を深刻に考えさせてくれる作品である。」と、大佛次郎賞の選考にあたった泰正流は評価している。

3、三浦哲郎のキーワード

<キーワード1 志乃をつれて深川へいった>

「忍ぶ川」の冒頭の文章で、色紙など求められると、三浦哲郎が好んでしたための言葉である。「忍ぶ川」で芥川賞を受賞し、作家としてスタートした時の、清新な初心を忘れまいとして書いてきた言葉。

三浦哲郎が大学入学にあたり、経済的に支えてくれた次兄益男が働いていた職場が深川の木場だった。大学一年の時、突如行方不明となった次兄。生死を

確認できないまま現在に至っているが、この言葉を記すたびに「どこかで、ひっそりと生きているに違いない…」と、心の奥底で願っているようでもある。

<キーワード2 一尾の鮎を念頭に置いている>

「私は、短篇小説を書く時、一尾の鮎を念頭に置いている。」三浦哲郎の好きな言葉の一つで、短篇「一尾の鮎」の冒頭の一文だ。文学をこころざして以来、短篇に心を置いてきた。「いちど大隈講堂で、盲目の琴の名手・宮城道雄六段の調べを聞いたことがある。演奏する前に、氏は、琴は最初のひと弾きで曲の全体を把握しなければならないという意味のことを話された。それを聞いて、短編小説と同じではないかと思った…私は、ゆくゆくは短篇作家になりたいと思っていた。井伏鱒二の『けい(鶏の旁が鳥ではなく佳)肋集』という作品を常に身近に置いて、バイブルのように読み返し、自分もこのようにして、このような作家になりたいものだと思っていた。」(「私の東京追悼紀行」)

今まさに、自分が念頭に置いている、琴のひと弾きや、鮎の鋭い動作にも似た、自身の納得いく短篇に近づいたことの、言葉でもあろうか。

<キーワード3 笛と雪が好きである>

「笛と雪が好きである。秋祭の賑やかな北国の村で暮らしたい」という言葉も、三浦哲郎が好んで色紙に書く言葉だ。三浦文学の作品のほとんどが、北国のふるさとに舞台設定されたり、ヒントを得たものだ。

自身が語っているように、どこで見聞したもの、体験したものでも、寒暖・生活・地理に熟知した「ふるさと」に設定して描いてしまうのは、それだけ人一倍に強い愛郷心のあらわれでもある。

4、三浦哲郎のゆかりの場所

①三浦文学作品の数多くの舞台

ふるさと、北国の街八戸(青森県八戸市)

『海の道』『おろおろ草紙』『白夜を旅する人々』『しづ女の生涯』『夕雨子』『拳銃と十五の短篇』など数多くの作品の主舞台として登場。

『繭子ひとり』の舞台は八戸市の郊外であったが、NHKのテレビドラマ化するにあたり、作品の原風景が失われていたために、ドラマは三戸町で撮影された。

②三浦哲郎の次兄が働き、行方不明

深川、木場(東京都江東区)

作家としてスタートすることになった「忍ぶ川」の主舞台。大学に進学した作者を経済的に支え、また物心両面にわたって支えた次兄が働いていた場所。何度も兄に会うために訪れた、思い出深い場所であり、川向こうの向島は、また志乃にとっても幼い頃の思い出の場所であった。

③戦後、家族が移り住んだ「郷里の町」

(岩手県一戸町)

戦後、八戸市を離れた一家は、金田一村湯田を経て、昭和 28 年にこの町に移り住んだ。北上山地の北はずれの山間にある古い城下町で、馬淵川が町の中ほどを横切っている。

31 年、三浦は海老沢徳子を伴ってこの町に帰り、家族だけで「この世でいちばんちいさな結婚式」を挙げた。その時の様子は、小説「忍ぶ川」に美しく描かれている。

三浦は、八戸は〈生まれ故郷〉、一戸は〈郷里の町〉と呼び分けているが、三浦の最初の文学碑と菩提寺(広全寺)はこの町にある。

5、三浦哲郎の関連人物

☆小沼 丹(おぬま・たん):文学の先輩

早稲田大学文学部に再入学し、仏文科の仲間たちと創刊した「非情」という同人誌に発表した三浦の作品に最初に注目したのが、当時英文科の助教授で新進作家であった小沼丹だった。

創刊された雑誌「非情」を小沼に献呈すると「ほとんど折り返しに、氏から私のところに葉書が届いた。太宰治の影響が強いようだが、悪くなかった。この調子で書きつづけるように。そんな文面であった。私は嬉しさで頭がぼおとした。それ以来、

私は頂いた葉書を二つに折ってお守りのように上着の内ポケットに入れておいた……。」(「私の東京追想紀行」と、小沼丹との出会いの頃を回想している。この小沼を介して井伏鱒二の知遇を得る。

☆井伏鱒二(いぶせ・ますじ):文学の師

大学在学中に同人誌「非情」に発表した三つの作品が井伏の目にとまり、小沼丹を介して井伏邸を訪問。以来 1993 年7月に井伏が 95 年の生涯をとじるまで師事。

井伏の作品の一つ『七つの街道』収載の「久慈街道」は、その師弟関係を物語る。「久慈街道」の冒頭では「青森県に帰省中の三浦哲郎君から、都合がつけば久慈街道を見物に来ないかと云ってきた…」という書き出しではじまっている。井伏を師と仰いだ頃の、初期の師弟の清新さが、この作品のいたるところに芬芬としている。

☆船越 康昌(ふなこし・やすまさ):高校・友人

八戸高校を卒業し、早稲田大学政経学部に入學した頃、高校同級の船越康昌と偶然に出会うことから親交を結び、船越の影響で文学に開眼していった。当時船越は立教大学文学部に入學していた。

文学に全く関心がないスポーツ少年であった三浦が、中学～高校を通じて読んだ小説は、夏目漱石の『坊っちゃん』ぐらいのものだった。「そんな私が、文学を生涯の仕事にするようになったのは…一緒に郷里の高校を卒業した船越君という友人と、偶然に再会したからである。…私は、彼の勧めで小説を読むようになり、太宰治や、井伏鱒二や、上林暁を読んでいるうちに、もしかしたら自分は文学にこそ向いているのでは…」と当時を回想。

6、三浦哲郎の資料紹介

○「予科練を志願した級長」

原稿

255 mm × 360 mm (× 7枚)

「予科練を志願した級長(八戸尋常小学校)」と題する原稿7枚揃い。『同級生交歓 第1集』に掲載されている。

○「自作の劇化について」

原稿

255 mm × 360 mm (×5枚)

「自作の劇化について」と題する原稿5枚揃い。発表誌紙不詳。

7、三浦哲郎年譜

1931(昭和6)年…3月16日、呉服屋の三男として八戸市に生まれる。

1937(昭和12)年…八戸市立八戸国民学校入学。春、次姉自殺。夏、長兄失踪。翌年秋、長姉自殺。

1947(昭和22)年…県立八戸中学校5年の時、バスケットボールで青森県代表となり、国民体育大会で3位入賞。“隼の哲”と呼ばれる。

1949(昭和24)年…八戸高校卒業、早稲田大学政経学部経済学科入学。

1950(昭和25)年…次兄失踪のため休学し、帰郷。八戸白銀中学校で体育と英語の教鞭をとる。小説を書き始める。

1952(昭和27)年…教師をやめて家に帰り、血の問題から本気に文学を目指す。翌年、早稲田大学文学部仏文科に再入学。

1954(昭和29)年…級友と同人雑誌「非情」創刊。

1955(昭和30)年…「非情」3号発表の「遺書について」で小沼丹を介して井伏鱒二の知遇を得、その後師事。「十五歳の周囲」(「遺書について」改稿)で新潮同人雑誌賞受賞。

1956(昭和31)年…海老沢徳子と学生結婚する。

1960(昭和35)年…PR編集社に職を得て上京。

1961(昭和36)年…「新潮」に掲載された「忍ぶ川」で第44回芥川賞受賞。『忍ぶ川』『初夜』

1967(昭和42)年…この年から44年にかけて「文学界」に「海の道」連載。『結婚』『熱い雪』『結婚の貌』『剥製』『夜の絵』(昭和45年)『春の舞

踏』『おりえんたる・ぱらだいす』『夕雨子』『おふくろの妙薬』
『ユタとふしぎな仲間たち』(昭和 46 年)

1976(昭和 51)年…『拳銃と十五の短篇』で野間文芸賞を受賞。

1977(昭和 52)年…『三浦哲郎短篇小説全集』(全 3 巻)『おらんだ帽子』『素顔』
を刊行。

1983(昭和 58)年…前年刊行の『少年讃歌』で日本文学大賞を受賞。『暁闇の
海』『蟹屋の土産』『母の肖像』

1984(昭和 59)年…『白夜を旅する人々』刊行。翌年同作品で大佛次郎賞を受
賞。

1987(昭和 62)年…9月から『三浦哲郎自選全集』(全 13 巻、翌年 9 月完結)を刊
行開始。

1988(昭和 63)年…日本芸術院会員となる。

1990(平成 2)年…「じねんじょ」で川端康成文学賞を受賞。

1991(平成 3)年…『短篇集モザイク I みちづれ』で伊藤整文学賞を受賞。

1995(平成 7)年…短編小説「みのむし」で川端康成文学賞を受賞(二度目)。

2000(平成 12)年…青森県近代文学館が特別展「三浦哲郎芥川賞受賞 40 年記
念展」を開催。

2010(平成 22)年…8月 29 日、うっ血性心不全のため 79 歳の生涯を終える。